

基本情報 ■年代：慶長13年(1608) ■採取地：岩手県一関市大乘寺

■材質：木・布 ■寸法：(左)縦32cm 横13cm (右)縦26cm 横13cm



この資料のココがすごい!!

慶長十三年の紀年銘が入ったとても古いおしらさま。現在に至るまでどのように祀られてきたのだろうか?

お気に入りポイント

家に祀られるだけではない、巫女の重要な祭具だった!

学芸研究員の



学芸研究員
遠藤 健悟

柳田國男の『遠野物語』にも取り上げられたおしらさま。家の神として知られていますが、巫女の祭具としても重要なものでした。巫女が、おしらさまを振りながらその由来を説く姿は人形劇のようにも見えます。まだまだ謎が多いおしらさま、その役割とは一体なんだったのか?



巫女の必需品? 多様な信仰を集めるおしらさま

おしらさまをめぐる多様な信仰

青森・岩手県を中心として、東北地方に広く分布するおしらさまは、家の神、蚕の神、農業の神、馬の神として信仰されてきた。おしらさまは、頭部が男女の人頭か、馬頭と姫頭の一对の木偶で、木製が一般的であるが、宮城県や山形県には竹製のものもある。ふつうは家の神として神棚に保管され、毎年の祭日には女性のみが参加し、おしらさまを取り出して飾り、衣を一枚重ね足して祭礼を行う「おしらさま遊ばせ」をするものが多い。

一方、当館が収蔵するおしらさまは、それらとは少し性格が違うもので、民間宗教者でオガミサマと呼ばれる巫女が祭具として携帯したものとされている。オガミサマが祭具として用いる場合、おしらさまを両手に持ち、上下左右に振って、託宣の儀礼を行った。この際説かれる**おしら祭文**^{※1}は、おしらさまの由来を説く物語である。この物語の多くは馬娘婚姻譚で、この由来と木偶が結びつくことで、家の神という性格に加え、蚕の神や馬の神として信仰されるようになった。

大乘寺伝来の「おしらさま」

本資料は、岩手県一関市川崎町薄衣の大乘寺に保管されていた二体一對のおしら

さまで、慶長11年(1606)の紀年銘の入った大変古いものである。大乘寺は、宮城県北部から岩手県南部で活動するオガミサマの宗教的な中心地であり、後継者がいないとおしらさまを大乘寺に納めるといった場合が多かった。そのため、大乘寺にはオシラ堂が設置され、毎年10月16日にはオコモロガエと称して、オガミサマが集まり新しい赤い衣を着せる行事が行なわれている。大乘寺には多数のおしらさまが集まり、現在では約200体が納められている。これらのおしらさまは、いずれも家の神としての性格とは異なり、貴重な資料群として岩手県の有形民俗文化財に指定されている(当館資料は指定外)。また、紀年銘が入っているおしらさまは必ずしも多くはない。このような紀年銘を入れる経緯は、おしらさまの祀られかたの変遷が関わるものと考えられるが、それを明らかにする資料は少ない。本資料を含め、おしらさまについてさらなる調査・研究が期待される。

学芸研究員 遠藤 健悟
実習生 藤田麻里子

用語解説 詳しくはP26へ

※1 おしら祭文